

氏名：小柳敦史

論文題目：

神学史的方法によるエルンスト・トレルチ思想研究 ―歴史的思考の意味を中心に―

論文内容の要旨：

一 本論文の問題設定と目的

第一次世界大戦の敗戦を一つのハイライトとする、ヴィルヘルム末期からヴァイマル期にかけての激動の時代のドイツで、キリスト教神学、宗教哲学、歴史哲学、宗教社会学など複数の領域にまたがる業績を遺したエルンスト・トレルチ（1865－1923）の思想は、1980年代のいわゆる「トレルチ・ルネサンス」を契機として活発な研究の対象となり、その活況は現在でもなお続いている。近年のトレルチ研究が特に力を注いでいるのは、当時の複雑な神学的、社会的、あるいは政治的コンテクストの中でのトレルチの姿を明らかにすることである。本研究もまたこの研究動向に掉さしながら、トレルチの思想の解明を目指すものである。

本研究では次のように目標を置く。まず、近年のトレルチ研究と同様に、トレルチの活動した歴史的状況やテキストが公表された論争状況に対して可能な限り目を配る。テキストは、それが生成してきた文脈においてこそ、本来の意味を明らかにするものと考えからである。しかし他方で、本研究は、テキストの精密な読解による内在的解釈も放棄しない。テキストをとりまく歴史的コンテクストを重視することは、歴史的コンテクストにテキストを還元することを意味しない。歴史的コンテクストを念頭に置くことでテキストの正確な意味を取り出すことができる一方で、テキストの正確な解釈は、歴史的コンテクストの解明に資するものでもあるだろう。本研究ではトレルチのテキストを、彼を取り巻く状況との対話として読み解くことで、トレルチの思想に迫ると同時に、トレルチが活躍した時代の文化的・精神的状況の解明に貢献することも目指している。

また、トレルチ思想研究としては、個別のテキストの解釈とそのテキストの置かれたコンテクストの解明に終始することなく、トレルチ思想の全体を視野に収め、評価することのできる視点を追究する。この関心は、現在の、詳細な歴史的・実証的研究に集中するトレルチ研究の現状において最も欠けているものである。1980年代初頭にトレルチ研究が大きな転換を遂げて以来、すでに30年が経過した。その間に個別的な研究成果は数多く生み出されたが、トレルチという思想家の全体像を語りうる新たな視点が提出されているとは言い難い。細分化していくトレルチ研究の現状に対して共通の議論の土台を提供するためにも、トレルチの思想全体を語りうる視点が求められている。もちろん、筆者の力量では、文字通りにトレルチの思想全体を語る視点を議論することはできず、本研究の課題はかなり限定せざるをえない。しかし、その課題は範囲を拡大した議論と検証に開かれている。

このような目標を達成するために、本研究の具体的な課題は次のように設定される。まず、トレルチのテキストを時代的コンテキストへの応答として読み解くために、F・W・グラーフの提唱する「神学史」的方法を方法論として採用する。そして、この方法論により、1910年代からトレルチの晩年（1923年）までのトレルチの思索の歩みを、特に「歴史的思考」の意味を中心に検討する。

「歴史的思考」という主題の設定は、トレルチ研究としては決して突飛なものではない。むしろ、研究史において確認した通り、非常にオーソドックスな主題であるとさえ言える。しかし、オーソドックスなものであるとは言え、語られるべきことが全て語りつくされたわけではない。特に不十分だと思われるのは、トレルチが「歴史的に物事を考える」ことの重要性を主張する際にその発言が持っている、歴史的コンテキストにおける意味合いの分析である。本研究の結論を先取りして言えば、「歴史的思考」に関するトレルチの思想は、本研究で対象とする時間的範囲の中では基本的に変わらない内容を持っている。しかし、時代状況への応答の仕方として、アクセントの置かれ方に違いがある。もしも、時代状況を無視してトレルチの議論の構造だけに注目すれば、トレルチの思想は（少なくとも1910年代以降は）一貫したものと見える。他方、発言内容だけを取り出せば、時期によってかなりの違いがあり、トレルチの思想は変化を遂げたように見えるだろう。トレルチの思想発展を貫く統一性があるのか、トレルチの思想には転換点があるのか、という問いへの答えにも、「歴史的思考」を主題とすることである程度の道筋をつけることが出来るはずである。本研究では時代状況の変化に応じた、トレルチの姿勢の変化を、同時代の芸術・精神的運動との並行関係を意識しつつ、「前衛」から「後衛」への変化として考察したい。これは本研究独自の新たな試みである。

## 二 各章の概要

第一章では、世紀転換期のプロテスタント神学界に「前衛」として登場したトレルチの姿を確認した。その前衛性は歴史的方法の徹底的な適用にあったが、そこでは、歴史的方法によるキリスト教の研究こそ、危機に瀕している人格性を救出する手段だと考えられていたのである。その際、歴史的方法が従来の教義学的方法に対する批判として機能すると同時に、歴史的方法によって見いだされる宗教の役割も、他の文化的価値に対する批判的機能にあるとされている。そして、そのような関係にあるのは、歴史的方法による思考態度は、キリスト教的な宗教性に起源を持つ、人格性を前提としているというからであることを指摘した。

第二章と第三章では、歴史的思考がトレルチの思想において、どのような位置を占めているかを考察するため、トレルチの思想体系の評価と再構成を試みた。第二章では「体系」を含むとされた論考「倫理学の根本問題」の分析を行い、このテキストだけから「体系」を再構成することはできないが、経験的＝歴史的世界に開かれた性質をその「体系」は持っており、それがすなわち根本的に倫理的な姿勢だと考えられていることを明らかにした。

第三章ではトレルチにおける「本質」概念の四つの側面—「抽象概念」、「批判」、「発展概念」、「理想概念」と、トレルチの体系を構成する四つの学問分野—「宗教心理学」、「宗教認識論」、「宗教の歴史哲学」、「形而上学」—が基本的には対応しつつも入れ子構造を持つものとして整理した。つまり、トレルチにおいて「本質」は多元的かつ動的な性格を持ち、歴史に対する応答の中で見いだされ、追究されるものなのである。

第四章では、トレルチの思想体系の中心に位置づけられる「宗教的アプリアリ」という概念が、歴史への応答を可能にし、共同体形成を可能にする役割も担っていることを、当時の論争状況との比較の中から明らかにした。「宗教的アプリアリ」は、直接的にはリッチェル学派による排他的なキリスト教理解に対する批判に理論的根拠を与える役割を果たしたが、既存の教会ではない、新たなキリスト教共同体の形成の基礎論となりうる内容を持っていたのである。

第二部では、第一次世界大戦勃発を契機とする社会的の変動や学問の変革のうねりと対峙するトレルチの姿を論じた。第五章では、第一次大戦中のトレルチが展開したナショナリスティックな発言の内容を、そこで重要な意味を持つ「自由」の理解との関連から分析し、トレルチにおいては「ドイツ的自由」が「イギリス的自由」や「フランス的自由」と対置され、「ドイツ的自由」こそが真なる自由であり、その担い手だからこそドイツ性が称揚されるという、「自由」理解にもとづくナショナリズムがあることを明らかにし、その姿勢を「リベラル・ナショナリズム」と特徴づけた。そして、その発想は戦時という時局に迎合した、一時的なものであるわけではなく、彼の『信仰論』から『社会教説』までを貫く、「献身としての自由」という思想に由来するものであることを明らかにした。もちろん、この思想には献身の対象に対する批判的選択が無ければ容易に全体主義へと滑り落ちる危険性を持っている。第一次世界大戦開戦当初のトレルチは、その危険性に対する警戒心は低かったと言わざるをえない。しかし1910年代後半になると、トレルチは保守的言説の流行に対して警戒心を露わにする。その考察は第三部の課題となった。

第二部の残りの二章では、第一次世界大戦の敗戦を機に巻き起こった、学問の変革を求める声に対してトレルチがどのように応答したのかを検討した。第六章で論じたのは、アカデミズムの幅広い領域を巻き込んだ、「学問における革命」に対するトレルチの診断であった。M・ヴェーバーが『職業としての学問』で示した冷徹な学問観に対して、主としてゲオルゲ・クライスに属する若い学者たちが猛烈な反発を示した。トレルチはこの「革命」の要求に一定の真理契機を認めながら、古き学問の遺産を引き継ぐ必要性を訴える。トレルチが若者たちの要求に同意するのは、学問と人間の生を結び付けようとする姿勢である。専門化し、細分化していく学問が生全体の全体性から乖離してしまうなら、生の全体を語りうる「哲学」が必要になる。しかし、生の全体性の中には、これまで学問が担ってきた「合理的思考」も含まれるはずである。生を掴み取るために合理的思考を放棄してしまえば、生の全体性をつかみ損ねることになってしまう。ゲオルゲ・クライスのように、形骸化した学問の中に、詩的なインスピレーションなどによって無理やり生を注入するのではなく、

生の多様な営みの中に学問があることを認識し直し、生のさらなる形成にとって学問がどのような貢献ができるのかを考えようとするのが、トレルチの姿勢であった。

その頃、プロテスタント神学の内部でも、若い世代の神学者から、神学の刷新を求める声が高まりつつあった。トレルチはここでも若い世代に共感を示しつつ、それまでの神学から引き継がれるべきものを擁護しようと試みる。第七章ではその様子を確認した。若い神学者たちは、第一次世界大戦の前線で銃をとった「前線世代」であり、当時の芸術などとの精神的つながりも認められるため「神学的前衛」と呼ばれてきたが、それに対して本研究では、若い世代から批判される古い世代に属しながらも、若い世代の問題意識に理解を示すトレルチを、「神学的後衛」と位置付けた。かつてはリッチェル学派や保守的ルター派に対する「前衛」だったトレルチが、いまや後衛戦を戦っていたのである。神学的後衛としてのトレルチの戦いもまた、歴史的思考をめぐるものだった。しかし、それは批判の道具としての歴史的思考ではなく、社会と宗教との接点としての歴史的思考、あるいは共同体形成の基盤としての歴史的思考であった。

第三部では、そのような、未来へと向かい共同体を形成してゆく基盤となるべき歴史的思考が、いかにして可能になるとトレルチが考えていたのかを明らかにすることを目指した。第八章でそのための参照項としたのが、「保守革命」と呼ばれる知的動向だった。ゾンバルトやシュペングラーらの保守革命論者たちは、恣意的な歴史の利用により「ドイツ性」の意味を「ロマン主義」的なものへと切り詰め、その切り詰めたドイツ的原理の上にドイツ国家を建設することを目指していたのだ。それに対してトレルチの構想は多元的なものだった。歴史的思考を真摯に遂行すれば、ある歴史現象に流れ込むいくつもの歴史的文脈が見えてくる。そういった複数の歴史的コンテクストの総合として現在はある、その上に未来は形成される。それぞれに「個別性」を持つ歴史的存在者を結びつけることが、歴史的思考の役割なのである。かくして、トレルチは「歴史的教養(die historische Bildung)」が「共同体形成(Gemeinschaftsbildung)」を可能にすると主張する。

第九章では、これまで扱ってきた「学問における革命」や「保守革命」などの運動が生み出された同時代の状況について、広い射程からトレルチが論じている論考「コンサバティブとリベラル」の内容を分析した。そこでトレルチが取り出してくる根本的な思想的対立は「合理主義」対「非合理主義」という図式であった。この図式が政治的含意を帯びると、端的な事実性を尊重する「コンサバティブ」と、普遍的な理念を追求する「リベラル」との対立として現れてくるのである。たしかに、「学問における革命」や「保守革命」、あるいは「神学的前衛」においても、西洋近代の合理性に対する異議申し立てとしての「非合理主義」が主張されていたのだ。それに対して、両者の総合がトレルチの歩もうとする道である。その道のりについて、歴史哲学的に思索を深めたのが、大著『歴史主義とその諸問題』であった。

そこで第十章で、『歴史主義とその諸問題』の結論部で提示される「構成の理念」について検討した。それはまた、「歴史によって歴史を克服する」という有名なテーゼの解釈をめ

ぐる考察でもあった。その結果として明らかになったことは、「構成の理念」は「普遍史」から「現在の文化総合」へと橋渡しをする役割を果たしているが、それ自身は「普遍史」の問題圏に属しているということだった。このことは、「後衛」としてのトレルチにとっての歴史的思考の意味を考えれば納得のいくことである。なぜなら、「現在の文化総合」は現在の生の要求に従って未来の生の形成を求める、反歴史主義的、あるいは非合理主義的な敢行を核心に持つものだからである。「現在の文化総合」が歴史的に考えて妥当なものであるには、歴史の流れから（トレルチにおいては限定された意味ではあるが）普遍的な理念を取り出す「普遍史」的考察に基づかなければならない。非合理主義と合理主義の総合がトレルチの目指すところであるとは言え、トレルチの足場は合理主義の側、あるいは古き学問の側に残っている。歴史がもたらした問題を歴史的思考によって克服したうえで、新たな形成の土台を提供することが「構成の理念」が意味するところである。それは、生に対する新たな要求をもたらす非合理主義的な若い世代＝前衛たちに、合理性を持つ歴史的思考によって引き継ぐべき理念を整理するという、歴史哲学における後衛としてのトレルチの戦いであったと言えるだろう。

### 三 結論

以上の議論から、トレルチの思想に決定的な転換点はあるのか、という問いに答えるならば、本研究が主題とした歴史的思考の内容について言えば、そこに大きな変化はない。リッチェル学派や保守的ルター派に対抗して登場したトレルチも、晩年に『歴史主義とその諸問題』を著したトレルチも、同様に徹底した歴史的思考を要求する。しかもその際に、歴史的個物に埋没するのではなく、そこから妥当性を持った価値や理念をもたらそうとする姿勢にも違いはない。しかし、歴史的思考のどのような役割に強調点を置いてトレルチが議論を展開するかは、周囲の状況やそれに対するトレルチの診断によって異なってくる。「前衛」として登場したトレルチにとって歴史的思考が役割を果たすべきは、教義学的方法によって提示されているキリスト教理解に対する批判であった。しかし、第一次世界大戦がもたらした知的状況の激変の中で、「後衛」として発言するトレルチにとって大きな問題となったのは、全面的に否定されようとしている近代社会の中から、さらなる発展へと引き継ぐべきものを掴み取り、新たな理念の下での形成の土台を提供することであった。このように、時代状況によって、歴史的思考のどの側面が強調されるかは変わりうるのである。もちろん、批判性が強い前衛から、発展に関心のある後衛へ、という単純な図式では収まりきれない点は多々あるはずである。本研究が試みた、前衛／後衛という視点の設定、この視点が「神学史」に対して、あるいは「神学史」を超えて思想史や文化史一般に対して持つ意義については、さらなる検討を重ねていく必要がある。